

論文

「愛らしき口もと目は緑」について

持 留 浩 二

〔抄 録〕

J・D・サリンジャーの「愛らしき口もと目は緑」という短編小説は、ほとんど全ての作品において若者ばかりを描いてきたサリンジャーにとっては、大人の男女の情事を扱っているという点で極めて異質な作品である。これまで多くの批評家は、サリンジャーがその作品中でずっと描き続けた「無垢と欺瞞」といったテーマからこの作品を解釈しているが、本論文ではそれ以外の解釈の可能性を追求している。まず、この作品を解釈する際に、物語のエンディングにおいてアーサーがリーに対して、なぜジョーニーが帰宅したと嘘をついたのかが重要となることを指摘した上で、それはアーサーがリーを心配させないためについた嘘であったという可能性、アーサーの精神的破綻を示すものであるという可能性、さらに、実はアーサーは巧妙な策士であったという可能性を提起している。結論としては、これまでほとんど批評家によって指摘されてこなかった、実はアーサーは巧妙な策士であったという解釈が可能であることを論証している。

キーワード サリンジャー、「愛らしき口もと目は緑」、アーサーの嘘、コンテキスト

序論

アメリカの現代作家 J・D・サリンジャー (Jerome David Salinger) の短編小説「愛らしき口もと目は緑」(“Pretty Mouth and Green My Eyes”) は、彼の代表作『ライ麦畑でつかまえて』(The Catcher in the Rye) が出版された1951年に当時一流の文芸雑誌『ニューヨーカー』(The New Yorker) に掲載され、その後、1953年に出版された彼の代表的短編集である『ナイン・ストーリーズ』(Nine Stories) に収録された。

この物語は、ほとんど全ての作品において若者ばかりを描いてきたサリンジャーにとっては、大人の男女の情事を扱っているという点で極めて異質な作品である。それだけに、この作品に

込められたメッセージが一体どういうものなのか、サリンジャーのファンにとっては大いに興味をそそられる。本論文でも、批評家による解釈に言及しているが、多くの批評家はやはりサリンジャーがずっと描き続けた「無垢と欺瞞」といったテーマからこの作品を解釈している。これはもっともなことで、この作品は短編なので、作品中あまり多くの情報が与えられておらず、綿密な解釈するには材料が足りないために、彼の他の作品に解釈の材料を求めざるをえない。これはインターテキストという観点からも妥当な判断だと思われる。

しかし本論文ではそれ以外の解釈の可能性を追求している。インターテキストという考えとは別に、作品はそれ自体として独立したものであるという考えもある。もっと言うと、作品以外のコンテキストを重視しすぎると、作品解釈が限定されてしまい、個々の作品を自由に解釈するのが難しくなる。本来文学作品というものには開かれたものである。明らかな誤読でない限り、読者は作品を自由に解釈してよい。

第一章では、この作品を解釈する際にアーサーがなぜジョーニーが帰宅したと嘘をついたのが重要となることを指摘した。第二章では、それはアーサーがリーを心配させないためについた嘘であった可能性について論じ、第三章では、それはアーサーの精神的破綻を示すものであったという可能性について論じ、第四章では、実はアーサーは巧みな策士であったという可能性について論じている。第五章では、批評家の意見に言及し、それぞれの解釈について考察している。結論としては、これまでほとんど批評家によって指摘されてこなかった、実はアーサーは巧みな策士であったという解釈が可能であることを示している。

I アーサーはなぜジョーニーが帰宅したと嘘をついたのか

この小説の登場人物は三人である。弁護士を職業とするアーサー、アーサーの妻ジョーニー、そしてアーサーが勤める弁護士事務所の同僚でジョーニーと浮気をしているリーである。物語は今まさにジョーニーと情事の最中であるリーのもとへ電話がかかってくるころから始まる。電話の相手はジョーニーの夫であるアーサーだった。アーサーは、夜が更けても妻のジョーニーが帰宅しないので心配になり、リーならジョーニーの居場所を知っているかもしれないと思い電話をしてきたのだ。その夜のまだ早い時間帯に、リーやアーサー夫妻を含めて数名でパーティーを開いていたのであった。

当然のことながらリーは、同じベッドで隣にジョーニーが寝ているにもかかわらず、ジョーニーの居場所については知らないと言う。パーティーに来ていたエレンボーゲン夫妻と出かけたのではないかと嘘をつく。酔っばらっているアーサーの口から、ジョーニーがいかに男にだらしない女であるかということが語られる。

そんなアーサーに対して、リーはジョーニーの頭の良さや趣味の良さについて話す。アーサーはそんなリーの言葉を一蹴する。そのやり取りの中でリーも少々頭に血が上ったのか、仕

事と私生活の両方においてアーサーには問題点があることを指摘し始める。だがアーサーは聞く耳を持たず、ジョーニーは俗物的な人間で、男にしか興味がない動物だと決めつける。

アーサーは突然、このような日々にはもううんざりしているので、以前いた軍隊に戻ろうと思っていることを打ち明ける。もっと早くジョーニーと別れるべきだったのだが、別れなかった理由は、ジョーニーのことがかわいそうになったからだと言ふ。話をしても埒が明かないので、リーはアーサーに、おとなしくベッドに入ってジョーニーに帰りを待つよう言い、電話を切る。

それからすぐにまた電話がかかってくる。リーが受話器を取ると、アーサーからで、さっき電話を切ったすぐ後にジョーニーが帰宅したことを知らせる電話だった。リーは動揺し、どう考えていいのかわからないまま、電話を切る。ジョーニーが語りかけても、返事をする事もなく、じっと何かを考えている中で物語は幕を閉じる。

この物語を読んで読者はどう感じるのだろうか。おそらく、最後にリーがじっと考え込んでいる場面で、読者も同じようにじっと考え込んでしまうのではないだろうか。アーサーの妻ジョーニーはリーの横で寝ているにもかかわらず、アーサーはついさっきジョーニーが帰宅したことをリーに伝えた矛盾をどう捉えたらいいのか、リー同様読者も考えずにはいられないからである。つまり、この物語を読んだ読者がまず直面するのは、このエンディングにおける、ジョーニーが帰宅したことを知らせるアーサーの言葉をどう捉えるべきかという問いということになる。

アーサーが、本当はそうではないにもかかわらず、ジョーニーが帰宅したと告げた理由を考えてみたい。私には三つの可能性があるように思われる。一つ目は、夜中に自分の愚痴をずっと聞いてくれたリーに対する申し訳ないという気持ちがあり、これ以上リーを心配させないようにしたいという気遣いから出た嘘という可能性である。二つ目は、ジョーニーの浮気にさんざん苦しめられたアーサーが、この場面でとうとう精神的に破綻してしまい、ジョーニーが帰ってきたという幻想を目にしたという可能性である。そして三つ目は、実はリーがジョーニーと浮気していることを知っていたアーサーが、リーを困惑させるためについた嘘という可能性である。これら三つの可能性は全てその答えとなりえる。この作品は短編小説で、作品中それほど多くの情報が与えられるわけではないので、作品の中からはどの可能性が正しくて、どの可能性が間違いかを確定することは不可能だからだ。本論文では、これまでおそらく誰も主張したことのない三つ目の解釈が可能であることを論証したい。

Ⅱ リーを心配させないための嘘という可能性

可能な三つの解釈のうち、アーサーが自分の妻の浮気相手であるリーへの気遣いから嘘をついたという解釈をとると、アーサーは完全に間抜けな寝取られ夫ということになる。リーは、

アーサーの妻を寝取りながら、夫にそれに気づかれることなく巧妙に立ち回る狡猾な人間ということになり、「美しき口もと目は緑」という作品は、その狡猾な人間が、寝取られ夫に感謝までされてしまうという、ある意味救いのない物語ということになる。

ただ、本当に最後の最後まで救いのない物語なのかというと、そうとも言い切れない。なぜならこの物語が、妻のジョーニーが帰宅したことを告げたアーサーに対して、動揺を隠しきれないリーが、電話を切り、ジョーニーの問いかけにも応じず、じっと何かを考えこむという描写で終わるからである。この描写がなければ、人妻を寝取った男が寝取られた夫を狡猾にだましていい思いをするだけの物語と言えるのかもしれないが、それだけでは終わらず何とも言えない嫌な余韻を残して終わるこの結末が、この物語を単にうまく浮気をやり遂げた男の物語にとどまらないものとさせている。この時、彼は何を考えてこんでいたのだろうか。もし最後のアーサーの言葉がリーを心配させないためにアーサーがついた嘘だとすれば、このアーサーのリーへの思いやりが、リーを激しく動揺させたことになる。つまりリーは、愛する妻を寝取ることによってアーサーを傷つけている自分に対してアーサーが思いやりを示していることに対して良心の呵責を感じた可能性が高い。

この解釈をとった場合、エンディングの後この物語がどう展開することになるのだろうか。もちろんこの作品にはリーが考え込んでいる場面までしか描かれていないので、その後の展開は読者が想像するしかない。ただ、一つの可能性として、この良心の呵責にさいなまれたリーが、アーサーへの罪悪感から、ジョーニーと別れることを決意する可能性がないとは言いきれない。もしそういう展開が待ち受けることになるのであれば、間抜けな寝取られ夫というアーサーの役割が、結果的に彼にとって良い結果を生んだということになる。もちろん、リーとの浮気関係が終わったとしても、ジョーニーはそう簡単にアーサーとの関係を修復するような女性ではないだろう。また別の男を探し始める可能性は高い。しかし一時的であったとしても、アーサーは、自分の馬鹿正直さによって、愛する妻を再び取り戻すことができるのである。もしそういう解釈をとる場合、この物語のメッセージは、正直者が最終的には得をするという、トルストイの『イワンの馬鹿』のような物語ということになる。

この読みが正しいものであると主張するためには、アーサーがリーのことを心から信頼していることを示す必要がある。もし少しでも不信感があれば、アーサーに対して心からの気遣いを示すことなどしないはずだからだ。アーサーがリーを信頼しているということは、『戦争 PTSD とサリンジャー』の中で野間正二により指摘されている。野間がそう判断する理由はいくつかある。まずは「コネティカットに移り住みたいという願望をあたかも決意しているかのごとく語っている」こと、さらに「再入隊するはずもない軍隊に、再び入隊するかのごとく語っている」ことはアーサーのリーに対する甘えのなせる業であると野間は指摘する⁽¹⁾。また、会話中何度もアーサーはリーに、浮気の疑いがある妻には実はいいところがあることを告げることや、酒に酔って電話してきてもリーなら黙って聞いてくれると考えているところに

もその甘えが見られること、さらに会話中何度も出てくる「起こしてしまったんじゃないだろうか?」や「どうして切ってしまわないんだ」という言葉に表れていることを指摘している。そして野間は、そういった甘えはリーに対する信頼を表しているとしている⁽²⁾。

Ⅲ アーサーが精神的に破綻したという可能性

二つ目の可能性は、さんざん愛する妻に浮気をされて精神的に苦しめられたアーサーがいよいよ精神的に破綻したという可能性である。リーとの会話の中で、アーサーは何度も自分がジョーニーの男癖の悪さに苦しめられたことを吐露している。そういう苦しい経験を何度も繰り返してきたアーサーが、ついにこの時に精神的におかしくなり、ジョーニーが帰宅したという幻影を見たという可能性は考えられる。ただ、人間が嫉妬から精神的破綻に陥ることがあるのかどうかという疑問点は残る。

仮にこの解釈が合っていたとして、物語のメッセージはどういうものになるのであろうか。この場合、先ほど述べた一つ目の解釈におけるメッセージと同じものになると考えていだろうか。つまりアーサーはエンディングの場面で精神に異常をきたしてしまった。それを目の当たりにしたリーは動揺を隠せなくなる。そしてアーサーの精神的破綻にどう対処すればいいのか、真剣に考えざるをえなくなってしまう。そのエンディングの後この物語がどう進んでいくのかについても、やはり一つ目の解釈と同じ結果に至ることになる。リーがジョーニーと別れる可能性はあるが、それはアーサーの精神的破綻を知ったリーが、やはりアーサーに対する良心の呵責から身を引いたためということになる。

この読み方が正しいものであると仮定して、実際に作品中の描写から、この読みが正しいものであることを示す根拠を挙げてみたい。まず、「一つ分かっていることがある。もう間違いない。俺はもうこんなことで悩むのはやめるんだ。本気だよ。今度こそ本当に本気なんだ。きっぱりやめるんだ。五年間だからな。クソが」(“I know one thing. I know one goddam thing. I'm through beating my brains out. I mean it. I really mean it this time. I'm through. Five years. Christ.”)⁽³⁾というアーサーの言葉から分かるように、アーサーはもう五年間もジョーニーの浮気に悩まされ続けている。そんなアーサーに対して、リーは受話器の向こうから、エレンボーゲン夫妻とグリニッジビレッジにでも出かけたのではないかと気休めの言葉を吐く。それに対しては何も触れることなく、アーサーは妻の浮気の可能性をまくしたてる「あいつがキッチンでどこかの男に手を出したんじゃないかって気がするんだ。勘だけどね。あいつはいつも酔っぱらうとキッチンで男とイチャイチャし始める。もうこんなことは終わりだ。今度こそ本気なんだ。五年間もずっと……」(“I have a feeling she went to work on some bastard in the kitchen. I just have a feeling. She always starts necking some bastard in the kitchen when she gets tanked up. I'm through. I swear to God I mean it this time. Five

goddam—”⁽⁴⁾。

アーサーはリーに対していかにジョーニーが男癖の悪い女性なのかを語る「神に誓ってあいつは信用できない。あいつが信用できるのは、目の届く範囲にいるときだけだ。ああ、つまらんな。頭がおかしくなっちゃってる」(“I swear to God you can't. You can trust her about as far as you can throw a — I don't know *what*. Aaah, what's the use? I'm losing my goddam mind.”)⁽⁵⁾。このように、妻の浮気癖に苦しんだ挙句、彼自身がどんどん精神的におかしくなってしまうことを告げる。仕事から帰宅すると、家中の押し入れを片っ端から開けそうになる。もちろん浮気相手がいるかどうかを確認するためだ。

このようにアーサーは五年間もジョーニーの浮気に苦しめられ続けた。それが原因で、もう弁護士という仕事を辞めて軍隊に戻ろうとさえ考えている。軍隊に戻れば、少なくともそういった妻の浮気について一切考えずに生活することができるかもしれないからだ。それほどまでに妻ジョーニーの浮気はアーサーにとって極めて深刻な問題なのだ。そんなアーサーのような人間にとっては、心から愛する人の浮気が精神的破綻に至る原因となり得るのかもしれない。

Ⅳ アーサーは実は狡猾な策士だという可能性

三つ目の可能性、アーサーは実は狡猾な策士だという解釈を取った時のこの作品の読み方は、他の二つの解釈を取る場合とは全く異なるものとなる。アーサーは最初から、リーに対して獲物を狙うハンターのように、罠を仕掛け、追い詰め、息の根を止めるべくとどめを刺す計画を立てていたことになる。しかもアーサーの狡猾なところは、最初は自分がリーのことを、ジョーニーの浮気相手であるとは露ほども思っていないふりをしているところで、この辺りの狡猾さは刑事コロンボのようである。コロンボのように、自分が無能であることをアピールし、相手を油断させ、自分より優位に立っているように感じさせ、その間虎視眈々と相手がミスをする瞬間を待ち受ける。コロンボ同様に、犯人を動揺させることができれば彼の勝ちだ。実際に、リーは、物語の間中ずっと平静を装っていたが、最後にひどく動揺しているところを晒してしまう。

この読み方が正しいものであると仮定して、実際に作品中の描写から、この読みが正しいものであることを示す根拠を挙げてみたい。まず、物語の冒頭から、ベッドで寝ている自分の横には情事の最中の人妻が寝ており、そんな中その人妻の夫で自分の同僚でもある男から電話がかかってきたにもかかわらず、平然とその相手と話をし、全く冷静さを失うことのなかったリーが初めて動揺を見せたのは、電話相手のアーサーが、自分の妻のジョーニーの悪口を言った時である。仕事から帰宅すると、浮気相手が潜んでいるかもしれないという理由から、家中の押し入れを片っ端から開けそうになると言うアーサーに対してリーは「君はわざわざ、よく聞けよ、わざわざ自分自身を苦しめているんだ」(“You actually go out of your way—I mean

this, now—You actually go out of your way to torture yourself.”⁽⁶⁾と云い、「ジョーニーが素晴らしい子で、君はとても幸運なんだよ。本当だ。なのに君はあの子の趣味の良さを評価してやらない。頭の良さだってそうだよ」(“You’re bloody lucky she’s a wonderful kid. I mean it. You give that kid absolutely no credit for having any good taste—or *brains*, for Chrissake, for that matter—”)⁽⁷⁾とジョーニーを擁護する発言をする。それまではとても丁寧で控えめな表現を使ってアーサーをたしなめていたリーが、ここでは断定調でジョーニーが悪いわけではなくアーサーに問題があることを指摘している。

ところで、この発言の狙いはどこにあるのだろうか。二つの可能性が考えられる。一つ目は、リーが本気でジョーニーのそのような良い面を認めているという可能性だ。リーはジョーニーと浮気をしているが、もしかすると、ジョーニーのそのような面に魅かれてリーは浮気に至ったのかもしれない。リーは白髪頭の男性で、決して若い男性ではない。若い男性であれば、性的快楽を求めて浮気に走ることは珍しくないだろうが、リーくらいの年齢の男性であれば、そういう理由のみから浮気をしているのではない可能性も高い。もしかすると本当にリーはジョーニーに人間的な魅力を感じ、そういう魅力から浮気に至ったのかもしれない。

二つ目の可能性は、今まさにリーの目の前にいるジョーニーの機嫌を取るために、悪口を言われ続けているジョーニーを庇う発言をしてしまったという可能性である。つまり浮気相手の目の前で格好をつけるためにこういう発言をしてしまったということになる。リーという人間は、見た目も行動も、完璧な人間を演じようとしているところがある。下に引用する物語冒頭のリーの白髪の描写は、完璧な人間を連想させるものとなっている。

Though in disarrangement at the moment, it [Lee’s gray hair] had obviously been freshly cut—or, rather, freshly maintained. The neckline and temples had been trimmed conventionally close, but the sides and top had been left rather more than just longish, and were, in fact, a trifle “distinguished-looking.”⁽⁸⁾

今は乱れていたが、彼のグレーの髪はカットしたてであることが見て分かった。あるいは、手入れをしたてと言うべきだろうか。首筋とこめかみあたりは普通に短くカットされているが、横と頭の上はやや長いというよりも少し長くなっていて、つまりは「凛々しい」感じであった。

もしアーサーが、実は狡猾な人間で、リーとジョーニーの浮気をほとんど確信しており、その証拠を握るために様々なトラップを仕掛けていたのだとすれば、ここでリーがやや冷静さを失って、アーサーに対して少々攻撃的になってジョーニーを擁護している姿は、アーサーには二人が浮気をしていることを示す有力な証拠と映ったはずである。アーサーは攻撃の手を緩めることはなく、ジョーニーは理性など持ち合わせていない「動物」(“animal”)であると、さ

らなるジョーニー批判を加える「頭脳だって！冗談はやめてくれ。あいつにはこれっぽっちも頭脳なんてあるもんか！あいつは動物なんだ」（“Brains! Are you kidding? She hasn't got any goddam brains! She's an animal!”）⁽⁹⁾。

それに対してもリーは反論する「基本的には、人間すべて動物だよ」（“Basically, we're all animals.”）⁽¹⁰⁾。この意見はおそらくリーの本音なのだろう。そして生物学的には事実だ。人間も、生物の一種に過ぎず、動物の仲間である。人間には、動物にはない理性があると言われるが、ある程度理性で行動をコントロールできる人間もいれば、そうでない人間もいる。理性よりも本能に動かされている人間が多く存在する以上、「人間には理性がある」という主張は程度問題としか言えなくなる。程度の差こそあれ、動物の世界には婚外性交渉が見られる。リーの「人間すべて動物だ」という言葉には、「人間も動物の仲間なのだから、浮気くらいは当たり前にするものなのだ」という不倫をしている自分を正当化する意味合いが込められているように思われる。その意味合いまで理解してのことだろうか、アーサーは、自分は決して動物などではないと主張する。おそらくここには、自分は決して浮気などはしないという意味が込められているのだろう。

この場面で二人は、「人間は動物かどうか」を議論するのであるが、この議論に関して、客観的に考えると人間は動物の一種なので、アーサーの言っていることは事実と反する間違った主張であると結論付けてしまうことは、ここでアーサーが本当に言いたいことをくみ取れていないということになる。アーサーは、人間が動物かどうかなどどうでもよく、自分が浮気をするような人間かどうかを語っているのである。

リーはそんな自説にこだわるアーサーに対して「君は、極めて知性のある人なのに、この上なく機転が利かないんだ」（“for a helluvan intelligent guy, you're about as tactless as it's humanly possible to be.”）⁽¹¹⁾と批判する。この言葉はある意味かなりの皮肉を含んでいるとも言える。というのも、もし実はアーサーが策士であるとすれば、そのことに全く気付いていないリーこそが完全に機転が利いていないということになるからだ。実はアーサーは見事に機転を利かせている最中なのである。それに気づかずに、リーはその日のアーサーの仕事の話、アーサーが代理人を引き受けている裁判の話へと話題を移す。その日アーサーは自分が抱える裁判で敗訴の判決を受けていた。もしかすると、リーはそのことをあらかじめ知っていたのかもしれない。あるいは、具体的に知っていなかったにせよ、十分に予見できていた可能性はある。そのことが分かっていた上で、アーサーに対して、その間違った態度を改めなければ、そのように仕事でもうまく行かないのだということを示したかったのかもしれない。あるいは、隣で寝ているジョーニーに対して、アーサーの無能さを示すことで、自分の魅力を引き立たせようとしたのかもしれない。

アーサーの方も、黙ってリーの攻撃を受け続けてはいない。彼はまた新たな一手を打つ。以前に彼が所属していた軍隊に戻ることを考えているということ唐突に告げるのである。今の

状況、妻のジョーニーの浮気癖をめぐる状況に苦しんだ挙句、全てを忘れるために軍隊に戻ることを考えているとアーサーは述べる。これにはリーも動揺を隠せなくなる。おそらく自分のせいでアーサーの人生が一変することに対する責任を感じてしまったのかもしれない「君のその頭の中にいくらか分別を叩き込んでやりたいよ。……君は知的なはずの男なのに、完全に子供みたいな口のきき方をする。……君は様々なちっぽけなことを、君の頭の中でとてつもない大きなものに膨らませてしまって、あらゆることが手に負えなくなるんだ」(“I’d like to beat some sense into that head of yours.... For a supposedly intelligent guy, you talk like an absolute child.... You let a bunch of minor little things snowball to an extent that they get so bloody paramount in your mind that you’re absolutely unfit for any—”)⁽¹²⁾とアーサーにその考えを改めさせようとする。

ここからは、アーサーは畳みかけるように自分がいかにジョーニーのことを愛しているかということ、そして長い年月愛しあった歴史があるということをしてリーに語る。自分は終始一貫してジョーニーのことだけを愛してきたし、二人には長い歴史がある、だから君は身を引いてくれと言わんばかりである。まずアーサーは、過去に別れようとしたことがあったが、ジョーニーのことがかわいそうになって別れることはできなかったということ、彼女はあまりに子供っぽいので自分がそばについてやらなければならないということ語る。でも、二人の相性が悪かった、そのことは結婚前に分かっていたが、その結婚前の閃きを自分は無視してしまった。つまり自分は弱いのだとアーサーは言う。ここでの弱さとは自分の信念、いわば心の声、に従う強さがなかったという意味であろう。

ここでアーサーは再び新たな一手を打つ。今からリーの部屋に行くと言うのだ「君が構わないなら話だよ。ほんの少しだけでいいんだ。ただどこかに座りたいだけなんだ。どうかな。行ってもいいかな？」(“I mean if it’s all right with you. I’ll only stay a minute. I’d just like to sit down somewhere and—I don’t know. Would it be all right?”)⁽¹³⁾。もしリーがジョーニーとの浮気の真っ最中であれば、リーはこの求めを絶対に拒否するはずだ。そして彼は実際に拒否する。リーはその拒否の仕方においても完璧だった。心の中ではきっと動揺していたはずであるが、相手に自分の動揺を悟られないようにうまく拒否した。

I mean you’re more than welcome to come, but I honestly think you should just sit tight and relax till Joanie waltzes in. I honestly do. What *you* want to be, you want to be right there on the spot when she waltzes in. Am I right, or not?⁽¹⁴⁾

君が来るのは大歓迎だ。でも正直なところ、ジョーニーが舞い戻ってくるまでは、しっかりと腰を下ろしてのんびりしていた方がいいと思うんだ。正直そう思うよ。君だって、彼女が舞い戻ってきた時にその場にいたいだろう。違うかね？

ここでのリーは完璧な返答をしているように思われるが、リーほどの手練手管に長けた人間には造作もないことであろう。そのことはアーサーにも分かっていたはずだから、アーサーも簡単に上のリーの完璧な返答に騙されることもなかったはずだ。リーは、おそらく浮気相手のジョーニーの前でも、完璧な男を演じ続けるはずだとアーサーなら考えたはずだ。電話の相手から、自分の情事の相手である女の悪口を言われ続けるのは、そんな完璧な男が取るべき行動ではない。そして彼は自分に求められた役割通りに、ジョーニーを庇った。実際に、リーがアーサーとの電話を切った後、ジョーニーはそれまでの一連のリーの冷静な受け答えを絶賛する「あなたは素晴らしかった、本当にすごかったわ」(“You were wonderful. Absolutely marvellous.”)⁽¹⁵⁾。

ただ、もしこのアーサーのジョーニーへの中傷が、アーサーによる罠だったらどうだろう。ジョーニーが現在リーと浮気中であることを知っていて、完璧な男を演じるリーならきっとジョーニーを庇う発言をするだろうと予想した上で仕掛けられた罠だとしたら。もしそうならば、リーはまんまとアーサーの罠にはまったことになる。すぐさまリーがジョーニーを庇う発言をしたのを聞いたアーサーは、現在二人が情事の最中であることを確信したはずだ。

アーサーとの電話を切った後、ジョーニーによる絶賛とは反対に、リーはかなりの動揺を見せる。それは電話を切った直後のリーの言葉から明らかだ「いや、実のところ、どうにもならん状況だ……全てのことがあまりに突拍子なくて……」(“Well, actually, it's an impossible situation,... I mean the whole thing's so fantastic it isn't even —”)⁽¹⁶⁾。さらにリーは次のように言う「そうだな、かなりまずい状況になっていることは確かだ。今の奴の状態は明らかにとんでもない……」(“Well, it's a very, very tough situation. The guy's obviously going through absolute—”)⁽¹⁷⁾。

ここで問題なのは、それまでのアーサーとの会話の中で、何が一番リーを動揺させたのかという点である。一つ考えられることは、アーサーによる軍隊に戻るという告白である。それ以外の話の内容は、おそらくこれまでの二人の会話の中で幾度も話されてきたことで、それゆえリーも予想通りに話を進めていたはずだ。ところがアーサーが今の弁護士という職業を辞め軍隊に戻るという話はこの時に唐突に出てきた話だった。「その話したっけ？」(“I tell you about that?”)と尋ねるアーサーに対して、リーは「いや、してないよ、アーサー」(“No, you didn't, Arthur.”)⁽¹⁸⁾と答えている。電話を切った後でリーがジョーニーに言う「あまりに突拍子なくて」という言葉は、アーサーが軍隊に戻るということを指しているのではないだろうか。

もしかすると、この時に初めてリーはアーサーにとってジョーニーの浮気の問題が極めて深刻なものであったことに気づいたのかもしれない。人間というのは、自分の尺度で様々な物事を捉えがちである。浮気を大した問題ではないと考えている人間は、簡単に浮気をしがちであるし、浮気で悩んでいる人の悩みも大した問題ではないと考えがちだ。浮気など大して道徳的

に問題ないと考えていたリーにとって、アーサーの悩みも大したものとは思えなかったということは大いにあり得ることだ。

そして、再びアーサーが電話をかけてきた時、リーの激しい動揺がさらに激しい動揺に変わる。この夜ずっと冷静な行動をとり続けてきたリーは、明らかに取り乱した様子で「くそっ」(“Christ!”)と言って受話器を取る⁽¹⁹⁾。そんなリーにアーサーは、たった今ジョーニーが帰宅したことを告げた。リーは、電気スタンドが背後にあるにもかかわらず、目の上に左手をかざす。つまりまぶしいわけでもないのに目の上に手をかざしているわけで、ここから分かるのは、以前にも増して彼が動揺しているということだ。手をかざされた下の目は閉じられたままで、もはやリーはアーサーの言葉に対して受け答えさえできなくなっていた。

“...I mean—except you—who do we know in New York except a bunch of neurotics? It’s bound to undermine even a normal person sooner or later. Know what I mean?”

The gray-haired man didn’t give an answer. His eyes, behind the bridge of his hand, were closed.⁽²⁰⁾

「……つまり——あなたは除いて——ニューヨークで俺たちの知っている奴らは、みんなノイローゼだろう？ それが遅かれ早かれ普通の人間をむしばむことになるんだ。俺の言うこと分かるだろ？」

グレーの髪の子は答えなかった。彼の目は、かざした手の下で、閉ざされていた。

「みんなノイローゼ」というアーサーの言葉はリーの心にも響いたはずだ。リーからすると、今話をしているアーサー自身が完全に重いノイローゼ状態にあることが確実だからだ。ジョーニーは今リーと一緒にベッドにいるのだが、アーサーはたった今帰宅したと告げている。もしそれが本当だとすれば、アーサーは完全に幻影を見ていることになる。自分の同僚が、妻の不貞に苦しみ続け、今の生活をやめて軍隊に入ろうとしており、さらにはありもしない幻影を見ているのを目の当たりにして、リーはもはやその動揺を隠す余裕を持てなくなっていた。一回目の電話の会話では、何とかその動揺をギリギリ隠し通せたリーは、二度目の電話でもうそれができないことを悟った。

“I have a helluva headache all of a sudden. I don’t know where I got the bloody thing from. You mind if we cut this short? I’ll talk to you in the morning—all right?” He listened for another moment, then hung up.⁽²¹⁾

「急にかなりの頭痛がしてきたんだ。なぜかは分からんのだが。急に悪いが、この電話を切らしてもらっていいか？ また明日の朝話をしよう——いいかな？」。彼はしばらくの間受話器の向こうの音を聞いて、それから電話を切った。

これまで少なくとも会話上では冷静さを見せ続けてきたリーは、この時もはや会話上でも動揺を隠しきれず、明確に動揺していることを露わにしてしまう。もし二度目の電話がアーサーによるトラップだとすれば、ここでゲームオーバー、つまりはチェックメイト、完全な詰みの状態となるのだろう。エンディングの描写は次のようになっている。

Again the girl immediately spoke to him, but he didn't answer her. He picked a burning cigarette—the girl's—out of the ashtray and started to bring it to his mouth, but it slipped out of his fingers. The girl tried to help him retrieve it before anything was burned, but he told her to just *sit still*, for Chrissake, and she pulled back her hand. ⁽²²⁾

今回も、女はすぐに彼に話しかけた。しかし彼は答えなかった。彼は灰皿から燃えている煙草を手に取り——それは女のタバコだったが——自分の口にもっていかうとしたが、たばこは彼の指の間から滑り落ちた。その火で何かが燃える前に彼がそれを拾い上げるのを女は手伝おうとしたが、彼は女にただじっとしていろと言い、女は手を引っ込めた。

ここでリーはもう余裕ある完璧な男を演じられなくなっている。激しい動揺が彼を襲っていて、明らかに彼の頭はある考えで占められてしまっている。おそらく彼が考えていることは、これまでのアーサーとのやり取りの一部始終であろう。そして頭のいいリーは、アーサーが精神的に破綻したのではないかという結論に至るのではないだろうか。その次に考えることは、これからアーサーがどうなっていくのかということに違いない。

精神的に破綻したアーサーは、弁護士の仕事を辞め、軍隊に戻り、ありもしない幻影を見る廃人のような人間になる。そんな中でリーがジョーニーと別れることになる可能性は極めて高い。自暴自棄になった廃人と化したアーサーはその後破滅的な方向へ向かうだろう。そしてそうなった原因は全てジョーニーの浮気なのだ。そしてリーからすると自分がその浮気相手であり、つまりはアーサーの破滅に加担しているということになる。もしそのようなことをこの時のリーがひたすら考えていたならば、賢いリーならこの浮気から身を引くかもしれない。少なくとも、これほどの動揺の後に以前と同じようなジョーニーとの関係が続くとは考えにくい。もしそこでリーが身を引けば、アーサーの勝ちだ。仮にリーとジョーニーとの関係が続いたとしても、二人の関係がぎくしゃくすることになれば、アーサーの狙いは一部達成されたことになる。

V 批評家による解釈

サリンジャー研究の第一人者であるウォーレン・フレンチ（Warren French）は『サリンジャー研究』（*J. D. Salinger*）の中で次のようにこの作品を捉えている。

...his only attempt to deal exclusively with the problems of mature, professional people already deeply involved in the “ratrace.” A feat of technical virtuosity, the story disclosed, through the transcription of two telephone calls, the moral collapse of a man completely overwhelmed by the “phony” world.⁽²³⁾

(サリンジャーの数ある作品の中でこの作品は) 激しい出世競争にどっぷりとつかっている仕事を持った大人の問題のみを扱おうとした唯一の試みである。高度な技巧にあふれたこの作品は、二本の電話の描写を通して、「インチキな」世界に完全に圧倒されてしまった男の道徳的崩壊で締めくくられている。

フレンチは、アーサーを、『ライ麦畑』の主人公ホールデン・コールフィールドに似た男だとした上で、「電話の男は、少年期ではなく、建前上は「世間に認められた」社会人になった後で、感情的そして職業的な危機を経験するというさらにひどい苦悩に苦しんでいる」(“The caller...is suffering the even worse agony of going through his emotional and professional crisis not during adolescence, but after becoming a supposedly “established” member of society.”)⁽²⁴⁾としている。さらに、軍隊に戻りたいというアーサーについては、西部に逃げようとするホールデンと同じ現実逃避であると解釈している。

物語の最後でアーサーがジョーニーがたった今帰宅したという嘘をついたことについて、フレンチは「体面を保つ必要から真実に忠実であることから逃げようとするが、それさえも拒絶され、彼は、みじめな嘘をつくことによって同情を求めようとするが、それがますます自分の地位を下げることになる。その嘘が彼を利用している人々の目からすると彼をより軽蔑すべきものとさせるのである」(“Denied even the refuge of sticking to the truth by the need to save face, he cannot seek sympathy without deepening his degradation by telling pathetic lies that render him even more contemptible in the eyes of those who are exploiting him.”)⁽²⁵⁾と指摘している。

他方リーについては、「「インチキの」世界に順応し、そこで私腹を肥やしてきた、ホールデンの父親のような人当たりが良くずる賢い成功者である」(“a suave, slick success, like Holden’s father, who has adjusted to the “phony” world and fattened on it.”)⁽²⁶⁾とした上で、物語の結末を以下のように解釈している。

Even he, however, is moved by the calls that he receives. When at the end of the story, the girl attempts to help him retrieve a fallen cigarette, he tells her “to just *sit still*.” He may be thinking of his associate’s debasement, but he may also—like Eloise at the end of “Uncle Wiggily”—be feeling some lingering regrets about his own fall.⁽²⁷⁾

しかし彼でさえ、受けた電話に動揺する。物語のエンディングで、彼が落ちたタバコを拾

うのを女性が助けようとする時、彼は彼女に「じっとしてろ」と告げるのである。彼はもしかすると彼の同僚がひどく落ち込んでいることを考えていたのかもしれない。しかし彼はまた——「コネティカットのひよこひよこおじさん」のエンディングでのエロイーズのように——彼自身の墮落について延々と後悔の気持ちを抱き続けていたのかもしれない。

この解釈はインターテキストという観点からみると妥当な解釈のように見える。サリンジャーの作品を解釈する上で、その代表作である『ライ麦畑』をコンテキストに入れるのはサリンジャーのファンであれば、当たり前になってしまふことだ。ただ、本論文では、これ以外の読みの可能性を追求しており、『ライ麦畑』をコンテキストに入れてしまうと、その読みは見えなくなるということを強調したい。

サリンジャーの研究者である野間は『戦争 PTSD とサリンジャー』の中で、サリンジャーの作品を、サリンジャーが実際に第二次世界大戦で経験した戦争 PTSD という観点から解釈している。この本の中では主に「エズメに捧ぐ」（“For Esmé—with Love and Squalor”）、「愛らしき口もと目は緑」、そして「バナナフィッシュにうってつけの日」（“A Perfect Day for Bananafish”）について戦争 PTSD の視点から説得力ある解釈を行っている。

野間はアーサーが軍隊にいたという点に注目し、「（戦争 PTSD による）アーサーの性的な不能が、語り手によって皮肉な目で眺められているこの不倫関係の背後にあって、不倫関係にあるふたりのふるまいを見えないところで支配している」⁽²⁸⁾とし、「アーサーの性的な不能は、先にも述べたように、この作品の登場人物全員に影響を与えて、その生活をつらいものにしていく。戦争による PTSD の影響は、帰還した兵士だけでなく、そのまわりの人間にもつらい思いをさせることを描いている」⁽²⁹⁾という解釈を行っている。

2017年にアメリカでサリンジャーの生涯を描いた映画『ライ麦畑の反逆者』（*Rebel in the Rye*）が上映された。この映画は2012年に出版されたケネス・スラウエンスキー（Kenneth Slawenski）によるサリンジャーの伝記『サリンジャー ——生涯91年の真実』（*J. D. Salinger: A Life*）をもとにしたものである。この映画の中でも第二次大戦における過酷な戦争経験がサリンジャーの人生に大きく影響を与えたことが強調されていたが、野間が主張する戦争 PTSD という観点は、サリンジャーの作品を解釈する上で、今後ますます重要なものとなっていくであろう。

物語のエンディングにおける、ジョーニーがたった今帰ってきたというアーサーの嘘の理由については、野間は特に触れてはいない。しかしアーサーとリーの関係については、「ひとことと言うなら、アーサーはリーに甘えている」と主張する。さらに野間はこう続ける「甘えは、ある意味で、相手に対する信頼をあらわしている」⁽³⁰⁾。

つまり野間はアーサーはリーを信頼していると考えている。となると、彼が最後にジョーニーが帰宅したと嘘をついた理由は、本論文の一つ目及び二つ目の解釈となり、三つ目の可能

性は完全になくなる。三つ目の解釈は、アーサーがリーがジョーニーと浮気しているのではないかと半ば気づいて、リーをトラップにかけようとしているという解釈だからだ。この解釈をとると、アーサーはリーを信頼しているどころか不信感しか持っていないことになる。

サリンジャー研究で著名な田中啓史は『ミステリアス・サリンジャー——隠された物語』の中でこの作品について触れている。田中の解釈によると、リーが現実主義者であるのに対し、アーサーは非現実主義者であり、本当のジョーニーの姿を受け入れられず、自分が理想化したジョーニー像に頑なに固執している。一方リーは、アーサーの話に付き合い、彼を自分に有利なように誘導していく。しかしその巧みな誘導は、たった今妻が帰宅したというアーサーの嘘によって打ち碎かれる。田中によると、その時リーは自分の見にくい姿を思い知らされたというのだ「自分は「駆け引き」と「分別」しかない、「頭」だけのかたわ人間ではないか。いつのまにこんなに汚れてしまったのだろう、彼は醜い自分の姿に愕然としたのだ」⁽³¹⁾。

とにかく、電話をかけなおしてきたとき、アーサーはジョーニーをとりもどしていた。それはリーのかたわらにいる現実のジョーニーではない。「肌白くバラ色の頬、愛らしき口もと目は緑」と詩にうたった理想の姿そのまま、アーサーの胸のなかにいるジョーニーなのだ。現実のジョーニーの目が、「紫と見まごうほどの深い青」だろうと、「海の貝殻みたい」だろうと、彼は「緑の目」をした彼女との夢に自分を託して、生きてゆけるような気がしていたのだ。⁽³²⁾

この解釈では、アーサーの純粹さ、心の美しさが、リーに彼自身の醜さに気づかせることになり、あれほどの動揺を引き起こしたことになる。もしかすると、エンディングの後でリーはジョーニーとの関係を清算することを決意するかもしれないが、もしそういう結末になるとすれば、それはリーがずっとアーサーを苦しめ続けてきたという良心の呵責からというよりは、醜い自分自身の生き方を是正したいという気持ちから来るものなのだろう。

田中は、フレンチ同様に「コネティカットのひょこひょこおじさん」や『ライ麦畑』にも言及しており、フレンチに近い解釈をとっているように思われる。また、田中はこの物語のメインとなっているアーサーとリーの会話を誘導しているのはリーであると指摘している「親身のアドバイスを与えているように思わせ、相手を自分の有利なように誘導している」⁽³³⁾。しかし本論文では、実は本当に誘導しているのはアーサーの側であるという可能性を追求している。

結論

本論文では、サリンジャーの短編小説「愛らしき口もと目は緑」を解釈する際に、アーサーがリーに対してなぜジョーニーが帰宅したと嘘をついたのかが重要となることを指摘した上で、

その理由としての三つの可能性について言及している。一つ目はアーサーがリーを心配させないためについた嘘であった可能性、二つ目はその嘘はアーサーの精神的破綻を示すものであったという可能性、三つ目は実はアーサーは巧妙な策士であり、嘘をつくことによって彼の妻とリーの浮気を見極めようとしたという可能性である。本論ではこれら三つの可能性について具体的な根拠を提示して詳しく論じているが、特に強調したいのは三つ目の解釈である。これはこれまで誰からもなされてこなかった解釈であるがゆえに、特に力を入れてその可能性を追求した。

ある作家が書いた作品を解釈する際、出来る限り妥当な解釈をするために、我々はしばしばその作家が書いた他の作品にコンテキストを求めてしまう。それは真つ当なことであり、そのような読みの展開を通してそれまで見えてこなかったものが見え、作品に意味が付与されることは多い。特に「美しき口もと目は緑」のような短編小説を解釈する場合、短い作品中には解釈のヒントがそれほどちりばめられているわけではないので、そのようなコンテキストは大いに役立つのだ。

しかしそのような妥当な解釈をしているだけでいいのだろうか。自由な発想こそが有意義な研究に結び付くことがあるのではないだろうか。解釈に妥当性を求めすぎると自由な読みが展開できなくなる。作家は一生を通して同じテーマについてのみ書くわけではない。あるいは精神分析の無意識の概念を用いると、仮に作家が意識的にあるテーマについて書いていたとしても、無意識的には別のテーマが潜んでいることも大いにありえる。その作家についての先入観を捨てて、全く新しい読みを展開することは読書という行為をより豊かなものにさせてくれるのである。本論文では、この作品をあらゆるコンテキストから切り離し、どこまで自由に解釈できるのかをその目的とした。

【注】

- (1) 野間 (2005: 112)
- (2) 野間 (2005: 112)
- (3) Salinger (1953: 177)
- (4) Salinger (1953: 177-178)
- (5) Salinger (1953: 180)
- (6) Salinger (1953: 181)
- (7) Salinger (1953: 181)
- (8) Salinger (1953: 175)
- (9) Salinger (1953: 182)
- (10) Salinger (1953: 182)
- (11) Salinger (1953: 183)
- (12) Salinger (1953: 186-187)
- (13) Salinger (1953: 192)
- (14) Salinger (1953: 192)
- (15) Salinger (1953: 193)

- (16) Salinger (1953: 194)
- (17) Salinger (1953: 194)
- (18) Salinger (1953: 186)
- (19) Salinger (1953: 194)
- (20) Salinger (1953: 195-196)
- (21) Salinger (1953: 196-197)
- (22) Salinger (1953: 197)
- (23) French (1976: 130)
- (24) French (1976: 130-131)
- (25) French (1976: 131)
- (26) French (1976: 131)
- (27) French (1976: 131)
- (28) 野間 (2005: 123)
- (29) 野間 (2005: 126)
- (30) 野間 (2005: 112)
- (31) 田中 (1996: 183)
- (32) 田中 (1996: 183)
- (33) 田中 (1996: 182)

【引用文献】

French, Warren. *J. D. Salinger*. Boston: Twayne Publishers, 1976.

Salinger, J. D. *Nine Stories*. Boston: Little Brown, 1953.

田中啓史. 『ミステリアス・サリンジャー——隠されたものがたり』. 南雲堂, 1996.

野間正二. 『戦争 PTSD とサリンジャー』. 創元社, 2005.

(もちどめ こうじ 英米学科)

2022年11月15日受理

